



●健康教育の総合情報紙●

The
EM
教育医事新聞

平成26年・2014年

10/25

月1回25日刊

第362号

半年/4440円 1年

/8340円(送料・税込み)

1部 770円(税込み)

昭和63年5月24日

第三種郵便物認可

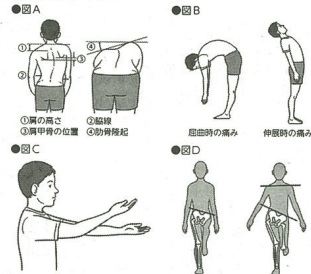
発行所
(株)教育医事新聞社

東京都新宿区四谷4-1-3012
〒160-0002
電話 03-3356-6571
FAX 03-3356-6572
郵便振替口座 〇〇六〇一四一九二四

http://www.the-em.co.jp/
e-mail hensyubu@the-em.co.jp

運動器に関する保健調査票のモデル

1. 背骨が曲がっている。
後ろから見ると、肩の高さ(①)やウエストライン(②)、肩甲骨の高さ(③)が揃う。おじぎをする(前屈姿勢)と、背中の中の出っ張り(④)が左右で揃う。(図A)
2. 体を反らしたり曲げたりすると腰に痛みがある。
おじぎをしたりかがんだり(図B)、反らしたり(伸展)したときに、腰に痛みが出る。(図B)
3. 腕や足に痛みのあるところがある。
特に、ひじやひざ、かかとに痛みのあるところがある。
4. 腕や足に動きの悪いところがある。
腕を伸ばすと、片方だけまっすぐ伸びない(最後まで曲げられない)ことがある(図C)。膝を曲げ伸ばして、うまく曲げられないことやまっすぐ伸びないことがある。
5. 立ち方や歩き方がごちない。
立つと片方に体や骨盤が傾いたりする(図D)。片脚立ちするとふらつく。



(日本医師会学校保健委員会、2014年3月より引用、一部改変=学研・教科の研究 保健ジャーナル103号より)

学校での運動器検診導入 2016年度から

学校保健安全法施行規則が一部改正され2016年度から学校健康診断の必須項目に骨や関節、筋肉等の異常を調べる運動器の検診が加わるようになった。一般財団法人運動器の10年・日本協会の担当理事として改正に尽力した武藤芳照・日体大総合研究所所長/日本体育大学保健医療学部教授に、運動器検診の狙いや今後の取り組みについて聞いた。

運動器の10年・日本協会 武藤 芳照理事インタビュー

日体大総合研究所所長
日本体育大学保健医療学部教授
(医療学部教授)

子どもたちには両腕を上げてバンザイできない、しゃがめないばかりか後ろに転ぶの。今後の健康診断の在り方、前方に転ぶと手



運動不足・過多二極化現象に対応 実施に向け「マニュアル」改訂へ

武藤氏らが出向き運動器検診の必要性について説明を
医の先生が簡単に正しく行

「整形外科医が検診をする方法は求められていません。昨年度までに日本医師会学校保健委員会に参画し、予定です。また、事後措置を丁寧にフォローできるようなガイドラインも必要だと考えています」
武藤氏は、元気な子どもを育てることは長い目でみれば介護予防にもつながると指摘する。「日本の将来にいても大きな問題である子どもたちの健康をかんがらなければならないため今後も尽力していきたい」

運動器検診導入の背景には、子どもたちに顕在化してきた運動不足と運動過多の二極化現象による深刻なからだの異変がある。

「幼い頃から戸外で体を動かした『運動遊び』やスポーツに親しむ機会のない子どもたちには、肩、腰、膝などのスポーツ障害に悩む例が増えつつあります。学校の健康診断に運動器に関する検査を導入することによって早い時期から適切な対応がとれ、社会全体の認識の高まりも期待できるという狙いがあります」

同協会では前身である運動器の10年・日本委員会時代から子どもの運動器疾患・障害予防への取り組みが重要であるという認識のもと、2005年度から6年かけて全国10地域で実態調査や早期発見のための健診方法などの調査研究を実施。併せて教育・啓発資料の作成、国や関係機関に要望書を提出するなどの動き